

擬似漢字系文字とは

■10世紀から12世紀にかけて東アジアの北側の地域で、国定の文字が次々に作られた。遼の契丹文字、西夏の西夏文字、金の女真文字¹、それから元のパスパ文字である。これらの文字は、国が滅ぶと共にいつしか途絶え、解読が必要な文字として今に至った。西夏文字・女真文字・パスパ文字はほぼ解明され、最初に作られた契丹文字だけがアジアの未解読文字、正確には解読半ばの文字として残った。これらの文字のうち、契丹文字と西夏文字と女真文字は、漢字に似せて作られた部分があることから、擬似漢字系文字と称される。

なお、擬似漢字系文字は、漢字に似せて創製された文字であるが、雑多な文字の集積という面もあり、漢字系文字とも非漢字系文字とも為し得ないものを一括して入れておく便利な枠組みともなる。ここでは、このような枠組みとしても擬似漢字系文字という用語を使用する。

■上に挙げた文字は10世紀から12世紀にかけて作られた国定の文字であるが、このような文字以外にも、擬似漢字系文字の枠組みに入れておくと便利な文字がある。それは、中国貴州省の水(ス)族の水文字と中国雲南省の僮(リ)族の僮僮文字である。こちらは最近まで使用されていた文字であり、解読の必要はない。

〈参考文献(発行年順)〉

白鳥庫吉 1898. 「契丹女真西夏文字考」, 『史学雑誌』第九編第十一・十二号。『白鳥庫吉全集 第五卷 塞外民族史研究 下』東京: 岩波書店, 1970年所収。

(文責: 吉池孝一)

¹ 契丹文字、西夏文字、女真文字の史書における位置づけは白鳥庫吉 1898 (「契丹女真西夏文字考」『史学雑誌』第九編第十一・十二号。『白鳥庫吉全集 第五卷 塞外民族史研究 下』東京: 岩波書店, 1970年所収) に負うところが大きい